る部落。

ミツヤマ　水山　珠洲郡鵜浦の東南方に當る山。高さ四〇五米。地質第三紀層。

ミツヰカヘエ　三井加兵衛　前田利家に仕へ、八百石を領し、天正十八年三月八王子城攻に出陣奮戰して討死した。その子覺左衛門値孝の時から氏を江守と改め、子孫代々藩に仕へる。

ミツヰショウヂ　三井小路　金澤の舊町名。寛政の頃、京都三井家の支店を此の小路の角屋敷に設けて呉服商賣をしたことがある。因つて小路の名となつたといふ。

ミツヲハマ　三ッ尾濱（ミツゴ）　鳳至郡大川の地内に屬し、二粁許の海濱をいふ。その海面を三ッ尾港といひ、百石内外の和船十數艘を入れることができる。

ミテツモクシヨウ　未徹默笑　金澤曹洞宗天德院廿一代の住持。弘化二年十二月十二日示寂。

ミトミシユウ　三富集　鳳至郡輪島の俳人晩穎の一周忌追悼句集で、晩穎の遺作をも加へてある。三富集と題したのは、故人が生業と子孫と風雅とに富んでゐたからであるといふ。序は安政三とせの秋標竹庵露樵。跋は古松齋沙雄。板元不明。

ミトミヨウジン　三戸明神　白山九所の小神の一つであるが、既に廢絶して所在詳かでない。白山記には『三戸明神、船岡平等寺境に在之』といひ、大永七年の託宣記には『三戸明神十八講河原』とし、式内等舊社記には、『三戸神社。鵜來村十八講河原鎭座。白山九所小神。稱三戸明神。手取川洪水。社地流失社殿廢絶。』とある。十八講河原から耕田の用水を引く水戸口に祀つた神祠であつたと見える。

ミドリ　見島　珠洲郡春日野の内の小字。

ミドリガイケ　翠ヶ池　白山記に白山鯽の峰のことを述べた次に、『是麓有二池水一。號二翠池一。適得二其水一嘗之。延齡方也。』といひ、白山遊覽圖記には、『綠碧池（齋土里之伊介）一名曹光院地獄。東西四五町。南北二三町。源發二大汝半腹積雪中一。水色鴨綠。深不レ可レ量。』とある。古事談に御在所と相去ること三十六町、深山の中に在つて縱横七八段許り、それを御厨の池と名づけるといひ、越前名蹟考に『二町餘を下りて御厨屋池とてすさまじき池あり。大師禪定の時九頭龍出現の所なり。』と記する御厨池は翠ヶ池を誤つたものであらう。又宗祇の名所方角抄に、『山頂に千蛇が池といふ有之、みどりの池ともいふ。』と見え、廿四瑤順拜圖會にも『山頂に千蛇が池とて、大なる池あり。綠水岸を浸し、其深さをはかるべからず。故に一名綠が池ともいへり。』と載せてあるが、千蛇ヶ池と翠の池とは別である。

ミトリジヨウ　見島城　珠洲郡金峰寺の内見島南方の一小丘で、土人は之を城山といふて居る。越登賀三州志故墟考に、金峰寺領に綠の城といふ地名があると記する。

ミドリダキ　翠瀧　金澤兼六園内に在る。この水は遠く犀川の上流から引かれた所謂辰巳用水で、その園内に入るや紆餘して曲水となり、一たび湛へて霞ヶ池となり、更に低逼に導かれて翠瀧を落下せしめ、その落水は卽ち瓢池をなすのである。翠瀧は一に松陰瀧ともいひ、その安永三年に作られたことは太梁公手記五月廿四日の條に、『八半時蓮池へ行云々。蓮池瀧今日懸る、甚宜。凡か程大きなる瀧はいまだ不見位也。』とあるによつて知られる。

ミトロウシ　水戸浪士　（一）天狗黨の擧兵—元治元年春、水戸藩の天狗黨藤田小四郎等は、密かに長藩と通じて兵を常陸筑波山に擧げ、勤王の大義を唱へたが、佐幕黨たる市川三左衛門等に攻められるに及び、衆寡敵するを得ずして那珂湊に退き、偶手兵を率ゐて來り會したる武田耕雲齋と共に、尙二ヶ月に亘つて抗戰した。しかも大勢遂に不可なるを以て、京師に出でゝその衷情を水戸藩の親族たる一橋慶喜に訴へんと欲し、敗兵を集めて十月廿三日那珂湊を發し、下野・上野・信濃・美濃を經て越前に向かはうとした。

（二）加賀藩の出兵—時に一橋慶喜は京都守護總督であつたが、自ら朝廷に請うて浪士の上洛を沮止せんとし、在京諸藩兵をして之に當らしめた。是より先、加賀藩は長連恭をして兵を率ゐ京師に出でゝ征長の役に與らしめ、その大部分は既に出發したが、兵士頭赤井傳右衛門直喜・不破亮三郎貞順・疇隊長武田金三郎友信・横目大島三郎左衛門弘直以下六百人は尙殘つてゐたので、前田齊泰は永原甚七郎孝知を監軍とし、之を統べて慶喜を援けしめ、十二月三日孝知等は京を發し、江州草津に次した。此の日慶喜も草津に進んだが、水戸浪士が琵琶湖の東西いづれに進路を取るべきかを斷じ得なかつたから、尙暫くそこに止つたが、六日浪士が間道を經て越前に向かふとの報を得て、本營を大溝に移し、加賀藩兵は卽夜大津より湖上を横ぎり海津に上陸し、九日海津を發して敦賀に着し、十日夕葉原（ハンバラ）に達した。

（三）浪士の行軍—是より先浪士は、十二月二日美濃揖斐を發し、備に辛酸を嘗めて鯉帽子峠を超え、五日越前秋生に露營を張り、六日笹又峠を過ぎ、遂に今庄を經て、十一日新保に達したが、それより二十町を隔てた葉原に加賀藩兵の出張して居ることを知つた。然るに浪士等は、この時既に疲憊して戰鬪力を失つたから、加賀藩との衝突を避けんと欲し、書を致してその上洛に至りたる顚末を述べ、路を開きて通過を許さんことを請うたが、加賀藩は素より之を容れなかつた。爾後加賀藩は、武士としての體面を維持せんとする浪士と、彼等の窘扼に乘じて蹂躙を恣にせんとする幕吏との間に介在して、周旋に極めて困難を感じたが、十七日に至り遂に浪士は無條件に加賀藩の軍門に降伏することになつた。因つて二十日永原孝知は降伏狀を携へて敦賀に至り、廿一日監察織田市藏に報じ、又海津に赴きて之を慶喜に上つた所、慶喜は大に悅び、物を孝知に與へて勞を賞し、且つ降人の監視を加賀藩に命じた。

（四）浪士の收容—加賀藩に降伏した浪士四十餘人は、馬七・八疋と共に、十二月十八日初めて葉原の營に着し、十九日には浪士武田魁介以下二百六十人も亦來り投じた。是に於いて加賀藩は彼等を敦賀に收容せんとし、廿三日先づ武田魁介の一隊を本妙寺に移し、廿四日武田耕雲齋等四百餘人を新保より敦賀の本勝寺に、廿五日葉原及び新保に殘存した七十餘人と負傷者廿五人を長遠寺に入らしめた。是等浪士の總人員に關しては、耕雲齋の調書に七百七十六人とし、加賀藩の實査に八百廿三